

問い 12 念仏者の生き方とはどのような生き方なのでしょうか。

「連研ノート検討部会」委員・研修講師
岐阜教区 楠 眞

* 「自他ともに心豊かに生きる」とはどのようなことでしょうか。

仏教は本来的に内省の宗教だと言えます。心の働きかけとして外的に「神」のようなものを想定するのではなく、内的に心の有り様を見据え続ける宗教性を大切にします。原点としてブッダ釈尊の、人生苦（老病死）はどこからやってくるのかという根源的問いかけがありました。その原因は、この世の道理を理解できない《無明》にあるのだというのが釈尊の気づきでした。釈尊は、この世の道理を《縁起》という言葉で明らかにされたのです。それは、時間的には因縁果の道理であり、空間的にはあらゆる存在は相互に依存する関係にあるということ。分かり易く言えば、持ちつ持たれつの関係にあるということです。

例えば、新型コロナウイルスは、世界中の人々がお互いにつながっていたのだということを明らかにしました。中国で発生したウイルスは、勝手にイタリア、アメリカ、ブラジルに飛んでいったのではなく、人から人へと伝染していったのです。それは、私たち人類が好き嫌いなど関係なく、日頃からつながりをもって生きていたという事実です。私たちは常に関係性の中にあるのです。このことを「縁起の法（道理）」と言うのです。

では、私たちはこの関係性をどのように生きてらよいのでしょうか。より善く生きていくためには、どうすればよいのでしょうか。このことについて釈尊は、実践的な生き方として《慈悲》の教えを説いてくださっています。「慈」とは、他者の幸福を願うということ。「悲」とは、他者の人生苦に寄り添い、悲しみの感情に共感して一緒に生きていくことを意味します。縁起の法にうなづく《智慧》と他者の思いに寄り添う《慈悲》が、宗派を問わず仏教の根幹であると言えます。自らの内面、心の有り様を深く見続けると、私はどのような人間なのか、生きることの意味とは、より善く生きるとは、の思いが次第に深まってきます。それと同時に、自分を含めた世の中のこと、外の世界、社会の有り様が気がかりとなるものです。なぜなら私の生活、それは家族とともにあり、社会とともにあり、世界とともにあるからです。私は勝手に一人で生きているわけではありませぬ。縁起の道理にうなづくとは、そのような理解、心持ちのことを言うのです。

それでは、世の中のこと、私たちがともに生きている世界に目を移してみましよう。現在、私たちの教団は「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）を推進しています。話し合い法座を軸にしながら信心を深め、なおかつ念仏者としての社会性を問いかけていく「連研」の営みも、この「御同朋の社会をめざす運動

(実践運動)の一環として進められています。社会性をともなう宗門内の運動は多岐にわたりますが、重点プロジェクトの共通課題として「子どもたちの笑顔のために～ Dāna for World Peace」の運動が展開されています。これは国内外の子どもたちの貧困を少しでも解消していこうというプロジェクトです。それは貧困の解消が平和な社会を形づくる基礎となるからであり、これこそ積極的平和貢献活動であるという理念に基づいています。

国連は、2016年(～2030年)に持続可能な世界を実現するための17のグローバル目標・169の達成基準項目から構成されるSDGs「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」を提唱して、地球上の「誰一人として取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っています。壮大で理想主義的な内容のように思われますが、具体的な実践目標の設定は人類の未来に必要な事柄ばかりです。この第1目標が「貧困をなくす～あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」であり、宗門の重点プロジェクトはこれに連動しているのです。「誰一人として取り残さない」という誓いは、まるで阿弥陀さまの願いのようではありませんか。たとえば具体的な「フードバンク」、「おてらおやつクラブ」、「子ども食堂」などの活動は、すでに広くNPO法人や宗教団体の枠を超えて展開されており、ご存知の方も多くおられると思います。これらの活動を通して、私たちがより善き生き方をめざして、人と人が共通の課題を担うということは、あらためて人と人が結ばれ合うことの大切さを思い起こさせてくれます。私たちは、一つらなりのいのちを一緒に生きているのですから。

「私」が、阿弥陀仏の大悲を身に受けてお念仏申させていただくとき、多くのいのちの相が見えてきます。そして「凡夫」であっても、互いに何かできることがあるのではと思えてきます。あなたもできることから何か初めてみませんか。私はささやかながら、ペットボトルキャップの回収運動をご門徒の皆さんと一緒にしています。この1年間で129,172個、300.4kg回収しました。活動を始めてから10数年、累計で1,167,667個、キャップをゴミとして焼却した場合のCO2発生量は8,848,82kgで、これを削減し、リサイクルによって医療支援や障害者支援、子どもたちへの環境教育などのさまざまな社会貢献活動に参画することができています。お念仏のお仲間と、一緒になってのささやかな「実践運動」です。凡夫であっても、心豊かに生きることをご門徒とともに実感しています。

問い 12 念仏者の生き方とはどのような生き方なのでしょうか。

「連研ノート検討部会」委員・研修講師
東海教区 松野尾 慈音

最後の問いは「念仏者の生き方」です。今までさまざまなテーマについて取りあげて来ましたが、それは振り返ってみれば、すべてが自分の生き方、あるいは自分が大切に思うことと結びつくことばかりでした。そこで今回は「念仏者の生き方」をテーマとして、それぞれ自分の生き方について考えてみましょう。

はじめて「念仏者の生き方」と聞いた方は、それは一体誰のことかと思われたかもしれませんが、11の問いについて取り組んでこられた今は「念仏者」とは自分のことについて言われていることがおわかりだと思います。少なくとも「念仏者」とは、念仏の教えをよりどころに生きていこうとする人のことです。

今まで「連研」を修了された方に「『連研』を終えて、何か変わったことがありますか」とお聞きすると、まず「お参りをするようになりました」とか「少しずつお勤めをしています」、あるいは「お寺の法話会に参加しています」など、「連研」に参加される以前より積極的に宗教への関わりを深めると話されるかたがたがおられます。その一方で「お話を聞いたり、皆さんの意見を聞いたりして、自分は何も知らなかったということにあらためて気付かされました」という方もおられます。中には「聞けば聞くほど、どうしようもない自分に気付かされた」という人もいます。つまり「連研」に参加したことで自分が変わったと思っている人もあれば、その逆に自分のあり方に気付いた人もいます。

『連研ノートE』の冒頭にある「連研のねらい」の中には「当てが外れても、思いが叶わなくても、自分を見失わない生き方」、「このままの自分と社会ではいられなくなる積極的な生き方」という「連研」を学ぶ目的が書かれています。そして今回改訂された『連研ノートE〔改訂版〕』から、この問い12に「念仏者の生き方」という問いが加えられています。このようにたびたび「生き方」という言葉が使われるようになったのは、実は私たちの教団では最近のことなのです。

というのは、お念仏の教えの伝統的な考え方では「私たちは修行や学問によってよりよい生き方のできる人間になって救われるのではなく、本質的に変わりようのない凡夫である」と言われてきました。そして、そのことを見抜かれた阿弥陀さまの本願の働きによって救われるのですから、教えによって私たちが向上して救われるのではないと言われ、凡夫の私がそのまま救わ

れるのが浄土真宗の救いであると言われてきました。生き方が問われないのが、浄土真宗の救いと言われてきたのです。

しかし、私が変わることはなくても、私の生き方が変わることがあるのではないのでしょうか。昔からお念仏の教えをいただくことを、「お育てをいただく」と、言い表してきました。お育てをいただくとは、私の生き方のうえに教えによって現れた変化です。その変化は周りの人にも明らかに分かるほどの大きな変化です。それはどんな変化なのか、ここで少し考えてみましょう。「仏さまのような人」とは、どんな人のことでしょうか。例えば「神さまのような人」と言えば「達人」のことです。「野球の神さま」や「サッカーの神さま」など、何人かの選手の顔が思い浮かびます。一方「仏さまのような人」といえば技能よりも人柄を思い浮かべます。やさしい、思いやりのある人、相手の立場に立てる人、つまり「自分を後回しにできる人」と言えるように思います。

私たちは自分中心で生きていますから、本来「自分を後回しにする」生き方はできません。しかしそんな私が、お念仏の教えによって必ずお浄土へ参らせていただく身になると、自分中心の物の見方や考え方が見直されるようになっていきます。なぜなら、お浄土とは単に私たちの願いが叶えられるような都合の良い世界ではなく、阿弥陀さまの願いによって建立された迷いのない真実の世界だからです。浄土に必ず生まれる身になるということは、常に浄土からの真実の働きを身に受けて生きるということなのです。

この浄土からの働きかけによって、私たちは常に浄土への道筋を歩む身となっていきます。それは阿弥陀さまにあこがれ、阿弥陀さまを慕う歩みですから、そこに阿弥陀さまのまねごとをする生き方が育まれるのです。そうなれば自ずと、自分中心の物の見方や考え方が見直されるようになっていきます。

このような生き方を、お釈迦さまは「自灯明、法灯明」と言い表しておられます。「自らを灯明とし、仏法を灯明とせよ」とは、お念仏の教えをいただく私たちにとって「浄土をよりどころとして、浄土に生まれる身になったことを自覚して生きていこう」ということです。念仏者の生き方とは、救われるための条件ではありません。教えをいただいた自覚によって自ずから育まれる営みを「念仏者の生き方」と表しているのです。